

「チ」ヨークアートは指で触って描くんですよ。その日の気象条件や人の体温によって仕上がりが違ってきます。そこがおもしろいんです」。笑顔を見せながらそう語るのは、浦添市前田出身のチョコレートアーティスト金城まみさん(32)。

金城さんは今年2月、「TVチャンピオン 極くKIVAMI」(テレビ東京) チョーク看板職人選手権の回で準優勝し、全国から注目を集める女性です。現在、神奈川県でフラワーショップを経営しながら大好きなチョコレートアートを描き、作品とその人柄で多くの人々の心をつかみます。

幼い頃から描くことが好きで、思い返すと絵ばかり描いていたという金城さん。チョコレートアートの出会いは2012年、金城さん25歳のとき。元々、大手アパレル企業に務めていた金城さんは、ファッションデザイナーとしてバリバリ働くことを目指していましたが、狭き門という現実。ファストファッションの流行。ブランドの縮小傾向という状況を目の当たりにし、現状への不安と将来への不安を抱きます。「アパレルは意外に体力を使います。将来的に結婚出産を考えたときに体力的に耐えられるかという不安もありました」と当時を振り返ります。そんなある時、会社の休憩室で手に取ったファッション誌。特集の中で紹介されていた「チョコレートアート」に出会います。高校卒業後の進路で、絵で生計を立てる未来図が描けず、絵とファッションの両方を学べる美術大学に進学し、これまで歩んできた道を振り返る。金城さんの胸を高鳴らせます。「これならいける」と直感した金城さんは、一大決心し、これまで務めた会社を退職し、チョコレートアートの世界に飛び込んだのでした。

「初めて描いたのはプルメリアの花。あまりの下手さに落ち込みました」という金城さん。教室で1年学び、2013年にプロ資格を取得します。しかし、そう簡単に仕事が入ってくるわけではありませんでした。初めは友人に「描かせてほしい」とお願いすることからスタート。「無料でやってしまうとただの趣味になる。この道を職業としていくと決めただけにはお金をいただいてこそ良いものを描きたい」、その思いで地道に活動を続けます。仕事が入っても安易に値切られる現状に「正當に評価されないことに、やめたいと思ったことも多々ありました」と金城さんは苦しかった胸のうちを明かします。「どうしたら評価されるのか」、悩みながらたどりついたのは「自分に自信を持つ」ということでした。「モノの価値は、作品の制作にかかる時間ではなく、その人が歩んできた時間や蓄積した経験、磨いた技術で決まり、それが自分の価値につながる。それを自負する揺るがない自信を持つことが大事なんだ」という考えに至りました。今は自信をもってそれだけの価値があると胸を張れる」と金城さんは自信に満ちた顔を見せます。



①アネモネをアレンジして描いた②琉球のメニューボードを想いを込めて描く③④彩り豊かな作品と画材道具⑤牧港で行われたワークショップ



PROFILE
金城 まみ (32)

浦添市前田出身。
CAA日本チョコレートアーティスト協会1級認定講師

■大事にしていること
①当たり前のことを馬鹿にしないでちゃんとやる。②「~ぶらず、~らしく」アパレル時代の研修で言われた言葉。今の仕事をする上でも大切にしている。この言葉を胸に人に寄り添うことを忘れない。

金城さんの作品をもっと見てみたい

■Instagram
[orangette_chalkart]



想いを
チョコレートアートに乗せて。
アートで彩る道

ROAD
輝く人たち No.30



少しずつ実績を積み、作品をインスタグラムで紹介するなどしていく中で、個人オーダーが少しずつ入るようになり、一個一個の仕事が少しずつつながりていき、TVチャンピオンへの出場、そして準優勝という結果を残します。「TVの反響はすごくて、教室受講を希望する生徒やオーダーも増えました。ありがたいことです。色々な人のサポートがあつてこそ。これまでご縁や一つ一つの積み重ねがあつて今がある」と喜びと感謝の表情を見せます。

金城さんは今後の夢をこう語ります。「チョコレートアートは絵が苦手な人でも楽しめます。絵に苦手意識のある人ほど触れてもらいたいです。苦手だったと思うことが出来ると人はうれしいもの。そういう喜びや自信を与えられたら」と。

「絵を描くときは、本物を見て食べて、空気感に触れてそのものを感じることが大切。そうすることで描く絵にシズル感が出て温かみが出るんです。これからの人の感覚を刺激するような絵を描いていきたいです」。どこまでもチョコレートアート愛に満ちた金城さんの目は輝き、その思いは彩りにあふれています。